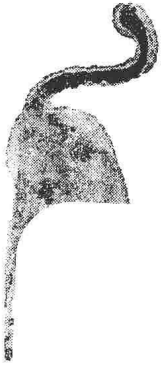
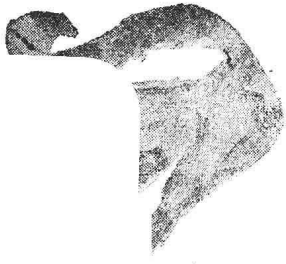
侵入者

侵入者





說新書

角川小説新書
侵入者

昭和三十二年四月十一日　初版印刷
昭和三十二年四月十五日　初版發行

定價　百貳拾圓

著作者　梅崎春生
發行者　角川源義
印刷者　東京都新宿區市ケ谷薬町一　草刈親雄

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番
電話九段(33)〇一二一(代表)一五

(落丁・亂丁本はお取替へ致します)

Printed in Japan　中央製本印刷・宮田製本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

侵入者

寫眞班

玄關のブザーが重苦しく鳴り響いた。二度短く、三度目は長く。茶の間でモリソバをたひらげてゐた彼は、心臓をどきんとさせ、あわてて箸を置いてよたよたと立ち上つた。彼は自宅のこのブザーの音をほとんど聞いたことがない。ふだんの日は勤めに出てゐるし、日曜日には來訪者はめつたになかつたのだから。しかしどうもこのブザーの音は心臓にひびく。玄關のブザーと書いたが、玄關にあるのは押しボタンであつて、ブザーの音源は臺所にとりつけてある。茶の間は臺所の隣にあるのだ。このブザーはずつと前の日曜日、見知らぬ電氣屋がやつてきて、なかば强制的に取りつけて行つたものだ。取りつけ終つて電氣屋は言つた。電池代だけはおマケにしときます。おマケだつて？　電池代だけがおマケだつて？　ブザーの響きの充滿した臺所を、彼は腹を立てながら擦過し、玄關に飛び出した。腹立ちの對象はもちろんブザーそれ自

身とそれをとりつけた電氣屋。それにそれを許容した自分自身もだ。玄關の扉を押しあけるとそこに見知らぬ男が二人立つてゐた。一人は四十前後のあから顔の男で、どういふつもりかひと握りの赤茶けたやうな鬚を、顎の下に生やしてゐた。も一人はそれより少し若い、頭をイガクリ坊主に刈つた男で、肩から重さうに大きな寫眞機をぶら下げてゐる。彼が玄關の扉を内側から押すとたんにブザーの音は鳴り止んだ。ボタンを押しつづけてゐたのは、顎鬚男の親指だつた。

「こんにちは」

今までボタンを押してゐた指で、顎鬚は自分の鳥打帽のひさしを上方に彈いた。

「寫眞を撮らせて貰ひに來ましたよ」

「寫眞？」彼はいぶかしく、またいらだたしげに反問した。「僕の寫眞をですか。僕はそんなものを頼まないですよ」

「あなたの寫眞ぢやありませんよ」

顎鬚はにやりとわらひ、玄關の土間にずいと入つてきた。イガクリも體をななめにして、片足だけを踏み入れた。二人まるまる收容するには土間は狹過ぎるのだ。そしてイガクリがぼんやりした聲で言つた。

「小さな玄關だなあ」

「近頃の建築はどこでも玄關が小さいのだよ」顎鬚がたしなめるやうに言つて、ふたたび顏を彼に向けた。「あなたの寫眞ぢやなくて、家の寫眞ですよ」

「家を寫して何になる？」えたいの知れぬ狼狽を感じて彼は天井を見上げたり壁を見廻したりした。「それに僕は……」

「いや、お心使ひは無用です」顎鬚はポケットから名刺をさつと取り出し、彼が手を出さないのに、それをしやにむに彼の掌に握らせ、イガクリを目顏でうながした。「さあ」

二人の男は一齊に腰をかがめて、ごそごそと靴の紐をとき始めた。押しつけられた名刺に急いで彼は視線を走らせた。「金融公庫住宅資料調査社寫眞班・多々良太郎」多々良といふのが顎鬚男なのだらう。その顎鬚が靴を脫いでのそのそと上つて來た。押し止める間もなかつた。つづいてイガクリが上つて來た。脫ぎ捨てられた靴で狹い土間は靴だらけになつた。彼は餘儀なく臺所まで後退(あとしさ)りした。廊下も狹いので、後退しないわけに行かない。後退する彼を追ひつめるやうに顎鬚も歩を進め、臺所にまで達すると立ち止まり、イガクリをかへり見た。

「面白いところに臺所があるな」

「さうだねえ」イガクリは寫眞機を肩からおろしながら、吟味するやうにきよろきよろとした。「ふん。こちらが茶の間か」

「ここを撮るか」顎鬚が兩手の親指と人差指を使用して四角なワクをつくり、それを自分の

顔の前であちこち動かした。「臺所から茶の間を見通すか」

「ちよつと待つて」彼はあわててロを入れた。「寫眞を撮るつて、そりやあ、あんたちよつと……」

「大丈夫ですよ」顎鬚がいやにはつきりした聲を出した。「貴方を撮るのではなく、家を撮るのだ。家といふものは、撮られても減りはしない。それにわたくしたちは命ぜられて、家を撮影する責任がある。それでお給金を貰つてゐるんですからねえ。だから家は撮影される義務がある」

顎鬚がしやべつてゐる間に、イガクリは金屬製の三脚をどこからか取り出して、ガチヤガチヤと脚を引き伸ばした。顎鬚は言葉をつづけた。「そこでわたしたちは家を撮つて廻つてゐる。撮るのは家だけですよ。なに、この家が公庫から融資を受けてゐることは判つてゐますよ。我我は公庫の名簿で調べて來たんですからな。おい、用意出來たか」

イガクリはしきりに手足や機械を動かした。

「家にその義務があれば、自然家の持ち主にも義務がある」

「義務といふと、寫される義務?」

「あんた自身には寫される義務はないですよ。そりや先刻から何度も說明した」顎鬚はいらいらして掌を打ち合はせた。「何故かと言ふと、あんたはまるまるあんただからだ。ところが

この家はさうでない」

「すると、貴方がたは、いや、貴方がたの、この調査社といふのは――」何か言はうと思ふのだが、言ふことが見附からないので、彼は手の名刺に眼をうろうろとさせた。「これは住宅金融公庫の、外郭團體か何かですか？」

「外郭團體であるか外郭團體でないか、といふおたづねですね」もうこれ以上質問は許さぬと言つたきつい口調で、顎鬚が念を押した。「ではお答へします。外郭團體ではありません！」

あまりにもピタリとした答へ方だつたので、彼は二の句がつげずたじろいだ。そのすきにイガクリはもう寫眞機を三脚の上に据ゑつけ、ファインダーをのぞいたり、横を向いてせきばらひをしたりしてゐる。肩や背中から急に力が抜けて行くやうな感じで、彼はそのまま茶の間の方にまた二、三歩後退した。（靴を脱がさなきやよかつたんだ）忌々しい氣持で彼はさう思つた。（この間の電氣屋だつてさうだつた。ごめんください、ごめんくださいと言ふもんだから、玄關に出て行つて見たら、もうそいつは靴を片一方脱いでゐやがつた）それも日曜日のことであつた。電氣屋はもうすこし怒つてゐるらしく、まだ三十にならぬ若い男だつたが、目を吊り上げて、脣の端に泡をすこし出してゐた。そいつはいきり立つた聲を出した。

「あんたは何度僕に、ごめんください、を言はせるつもりですか？」

「ごめん、ごめん」と彼はあやまつた。「奥の間にゐたから、つい聞こえなかつたんです」

「奥の間？」電氣屋は輕蔑したやうな聲を出した。「たかが十四、五坪程度のコマギレ住宅に、奥の間も控への間もありますかいな。こりや家の構造が悪いんですよ。玄關の聲は奥に通らず、ほとんど外に散るやうになつてゐる。これでは玄關の役目を全然果たしてゐない。ベルをつけなさい。ベルかブザー。ベルかブザーをつけるのは、もうあなたの義務ですよ」

「あなたはどなた？」彼はうんざりして訊ねた。「どういふ御用件です？」

「僕は電氣器具屋です」電氣屋は胸のポケットから、ハガキぐらゐもある大きな名刺を拔いて差し出した。「この家ではブザーですな。ベルをとりつけるには家が小さ過ぎる」

「で、御用件は？」

「ブザーのとりつけですよ」電氣屋はいらだたしげに言つて、殘つた足の踵も靴から引つぱり出した。上り框に片足かけた。「うちのブザーは性能がいいんで評判なんですよ。故障は起きないし、音色はいいし」

「ブザー？　誰がブザーを――」彼はちよつと頭が混亂して、口をもぐもぐさせた。「そ、それは、取りつけてもいいが、値段……」

「値段のことなんか言つてゐる場合ぢやないですよ」電氣屋の殘つた足も上にあがつてゐた。電氣屋は彼より三寸ばかり背が高かつた。「ブザーをつけなきや、來訪者が皆迷惑するぢやありませんか。ね、さうでせう。現に僕がさつき何度、ごめんください、と言はせられたと思ひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ます？」

「そ、それは判るが、つまり君が、ごめんくださいを連呼したのは、つまり、ブザーを賣りつけるために――」彼の顏はすこしあかくなつた。何が何だかよく判らなくなつてきたからだ。

「でも、僕はブザ！やベルの音は嫌ひなんだ」

「なぜ？」

「ごめんください、といふ聲を聞けば、來訪者のおほよその性格が見當つくけれど、ブザーやベルはさういふわけに行かない。ね、さうでせう」背の高い電氣屋を奥に通すまいと、狹い廊下に立ちふさがるやうにして、彼は必死に抗辯した。「友達のブザーも、押賣りのブザーも、保險勸誘人のブザーも、音色はひとつだ。性格がない。扉をあけるまでそいつの正體は見當がつかない。そんなのは僕は厭だね。ごめんください、の方がよつぽどいい」

「何を言つてんですか、あなたは」電氣屋は失笑して、右手を伸ばして彼の肩を押すやうにした。「いくらごめんくださいの方がいいと言つても、あなたに聞こえなきや意味がないぢやないですか。第一あなたは身勝手ですよ。ごめんくださいの連呼で來訪者を疲勞させ、疲勞させた揚句に正體を見當つけようと言ふ。トクをするのはあなただけぢやないですか」

彼は肩を押されて二、三歩後退りした。電氣屋は手をゆるめず、彼について前進した。そしてたうとう彼は臺所まで押し戻され、うやむやのうちにブザーを取りつけられてしまつたのだ。

その自分の引きさがり方が、今のこの寫眞屋の場合とそつくりだと思つた時、彼は茶の間に戻りながら身をよぢりたくなるやうな忌々しさを感じた。

（つまりおれがまごまごと押し戻されてしまふのは――）彼はしよぼしよぼとチヤブ臺の前に坐り、箸をとり上げながら考へた。（つまりこちらがはつきりしてゐないためだ。この家がはつきりと自分のものであるといふ自覺、そいつがこの俺にないためだ）

半年前にこの家を建てた時、それもやつとの思ひで建てた時から、その不安定なものが彼につきまとつて離れない、それには理由もあつた。家を建てた費用の約三分の一は住宅公庫からの借入金であつたし、殘餘の二分の一は彼が勤めてゐる會社からの借金で、そのまた殘餘の二分の一は親類や先輩からの借金であつた。彼が自分で出したのは、總額の六分の一に過ぎなかつた。そのことが當初から彼の意識にまつはり、彼の物腰を落著かなくさせてゐる。すべての因がそこにあるやうであつた。この家が彼の所有物であるといふより、自分がこの家の附屬物であるやうな、棟木とかガラス窓とか下駄箱、そんなものと等價値のものであるやうな氣がいつも彼にはしてゐる。（この家がはつきりと俺のものでないとすれば、一體これは誰のものだらう？）

彼は箸をソバにつけた。ソバは伸びてぐちやつとくつつき合つてゐた。その二筋三筋を引き剝がして口に持つて行く。ひどく不味い。不味いけれども食べ殘すわけには行かないやうな氣

持が別にある。彼はまた箸をソバに伸ばした。臺所でファインダーをのぞいてゐたイガクリが、首をかしげてうんざりした聲を出した。

「目ざはりだなあ。どけて呉れませんか」

「僕をどけろと言ふんですか」彼はソバをつまんだままむつとした顏を臺所に向けた。やはりすこし聲が高くなつた。

「あんたぢやありませんよ」顎鬚がなだめるやうに目尻に皺を寄せて言つた。「こいつが言つてゐるのは、そのモリソバのことですよ」「さうだ。さうだ」イガクリがうなづいた。「公庫住宅寫眞集にモリソバがうつつてゐては具合が悪い」

彼は肩をそびやかして何か言ひ返さうとした。が、すぐに肩を元の高さに戻した。ソバのザルを持つて立ち上つた。次の間に足を踏み入れた。部屋はもうこれだけしかない。そこをはみ出るともう庭になる。狹い庭には庭樹がたくさん繁つてゐる。彼は部屋のまんなかに坐り、ぼんやりした眼で庭を見廻す。何か不法なことが行はれてゐるが、その正體がはつきり摑めない。これが夢なら、何かの拍子にふつと判つてしまふのだが、夢ぢやないからさううまくは行かない。カチツとシャッターの音がした。低い聲で二人が臺所で何か相談し合つてゐる。彼はさつとそちらを振り向き、また顏を元に戻して、思ひ切つたやうに不味い殘りソバを箸でつまみ上げた。のびて團子狀にかたまつてゐるので、それは容易につまみ上げることが出來る。彼はそ

れを全部無理矢理に口の中に押し込んだ。目を白黒させながらそれを嚙んだ。二人の寫眞班は何かこそこそ話し合ひながら、臺所から茶の間に移動し、そのまま彼のゐる部屋に侵入して來た。まんなかに坐つてゐる彼を無視して、二人は立つたままガラス戸越しに庭の方をしげしげと眺めてゐる。

「ずゐぶんごちやごちやと樹が生えてゐるねえ」

「さうだねえ。まるで植木市みたいだな」

彼はまるで自分自身が光を發さない光源體みたいな感じになり、そいつをぶち破るために何か叫び出さうとしたが、口いつぱいに詰め込んだソバのために、それはほとんど聲にならなかつた。

植木屋

彼の家に出入りしてゐる植木屋は、一體何人なのか。一人なのか、二人なのか、三人なのか、あるひは四人もゐるのか、まさか四人以上といふことはないだらう。それはひとつに彼が人の顏を覺えるのが不得手のせゐもあつたし、またほとんど顏を合はせないせゐもあつたし、（しげしげと出入りはしてゐるのだが、彼が勤めの關係上日曜しか在宅しないので）それに植木屋

がしよつちゆう服装や恰好を變へてやつてくるのではないかと思はれる節もあつた。鬚を立てて見たり、また剃り落したり、太緣の眼鏡をかけたり、次に見るとたしか同じ顏なのにかけてゐなかつたり、ジャンパー姿で來るかと思ふと、軍隊服を著てゐたり、腹がけどんぶり姿であつたり、留守番の雇ひ婆さんの話ではさうであるやうだ。婆さん自身が植木屋が何人ゐるのか見當がつきかねてゐるらしい。もつとも婆さんはすこし耳が遠かつたし、視力も不確かになつてゐるのだから、それは無理もない。婆さんの話では七人か八人かゐるやうな具合だつたが、彼の家のやうな小さな庭に、七人も八人も出入りするわけがない。やはり一人か二人か三人かがさまざまに服装や恰好を變へてあらはれてくるのだらう。何故植木屋がさまざまに恰好を變へるか。植木屋といふやつは他人の庭をしよつちゆう模樣替へをするのが商賣で、その關係上、自分の服装や顏かたちなども模樣替へをしたくなるのだらう。

その植木屋（どの植木屋か）が彼の庭に姿をあらはしたのは、ここに引越して來て三日目の日曜日の夕方のことであつた。いつの間にかその植木屋は彼の庭（庭といふより空地だが）に入つて、濡れ緣に腰をおろして足をぶらぶらさせ、いろいろ目測するやうに頭をかしげたり、指を顏の前で動かしたりしてゐた。へんな奴がゐると思つて彼が濡れ緣に出て行くと、その足音に氣附いて、植木屋はななめに彼を見上げながらとぼけたやうな聲を出した。

「旦那。こいつはいい庭になりますぜ。ようがす。あつしに任しておくんなさい」

「庭？」

庭をつくるなんて思ひもよらなかつたし、そんな趣味も全然なかつたし、彼はびつくりした聲を出した。

「えゝ、庭ですよ。この空地は地味と言ひ、廣さと言ひ——」

「おいおい」と彼はさへぎつた。「こんな猫の額のやうな——」

「いや、廣けりや廣いし、狹けりや狹いで、ちやんとやり方があるんでさ」植木屋は自信あり氣に斷定した。「あつしなんかには、このくらゐの廣さが手頃でさ。ようがす。ひとつあつしが身を入れることにしませう」

「おいおい、早合點しちや困るよ。まだ庭をつくるとも何とも——」

彼も下駄をつつかけて庭へ降り、そのでこぼこの空地を踏みしめながら、さう言ひかけて振り返つた時、もうその植木屋の姿は濡れ縁には見えなかつた。早呑み込みして、さつさと退散して行つたものらしい。その日はそれで濟んだ。

それから四、五日して彼が會社から戻つてくると、留守婆さんがあたふたと彼に報告した。

「何だかへんな人が來て、庭に樹を植ゑて行きましたよ」

「植木屋だらう」

彼は濡れ縁に出て見た。庭のまんなかにぽつんと椿の木がつつ立つてゐる。へんてつもない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton